

---

# 笑え笑え 人間は交換可能

447ga

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

笑え笑え 人間は交換可能

### 【Nコード】

N1431Q

### 【作者名】

447ga

### 【あらすじ】

なんども人生をやり直す男の話。

サブテキスト

白石隆志の独断によって生まれた歪み

「篠塚さん、捕まっちゃったのね」

「ああ…」

「隆志も死んじゃったし…」

「自殺、だよな」

「ええ…。私たちのこと、バレてたのかしら」

「わからない」

「……………」

「実は、脱税のことなんだけど」

「？」

「あれは僕も関与していたんだ」

「!？」

「でもばれなかった」

「そうかもしれないけど…」

「僕はついてる」

「どういうこと？」

「これからは僕が君を守るよ」

●ゲーム以前1 白石隆志

白石隆志は映像業界の末端の製作会社に勤務していた。主な取引先はしがない芸能事務所で、星の数ほどいる「アイドルの卵」のイメージビデオを作ったりしていた。仕事の内容は純粋な製作で、企画に関われるような器量は白石隆志にも、会社にもなかった。しかし白石隆志ののんびりとした性格から言って、それはある意味適任

のように思われた。映像製作においては、スピードも大事だが、なによりも根気と体力が必要だと白石隆志は考えていた。そんな白石隆志の性格が、ある一定の地位を彼にもたらしたのは事実だった。

白石隆志は基本的には人に嫌われるタイプではなかった。一定のクオリティの仕事をこなし、それに応じた適度な尊敬の眼差しを受けていた。何よりも、人当たりが良いので、必ず第一印象が良かった。

5年前には結婚をした。相手は芸能事務所の「アイドルの卵」のひとりで、胸が大きく、目がパツチリと開いた利発的な娘だった。偶然居合わせた撮影現場で、彼女は白石隆志に一目惚れをしたのだった。やがて彼女の一途な思いに根負けした白石隆志は、彼女の思いに応えた形になった。

白石隆志は、顔にこそ出さなかったが、十近く年下の若い娘をモノにしたとあって、まんざらでもなかった。

最近は休日出勤がかなり多く、一緒にいられる時間が短いことを除けば、非常に順調な結婚生活だと、白石隆志は考えていた。仕事で大きなミスもしなくなったし、少しずつだが、コントロールも利くようになってきた。ある程度の我慢さえすれば、それなりの充実が得られることを悟っていたのだった。

しかし、一点だけ気になることがあるとすれば、それは会社の同僚の篠塚晃一のことだった。篠塚晃一は非常に頭が切れた。また行動力もカリスマ性もあった。彼の仕事振りに、新入社員は必ず尊敬の念を抱くほどだ。しかし白石隆志が思うに、篠塚晃一には忍耐力がなかった。自分の思い通りにいかないことがあると、子どものようにごねることがあったのだ。しかし、その忍耐力のなさも篠塚晃一のカリスマ性とセットになると「時には意地を貫き通すべき」という教訓を構築させてしまうから恐ろしいと白石隆志は考えていた。白石隆志にとって篠塚幸一は、不用意にルールを壊すだけの危険な存在でしかなかった。白石隆志はできるだけ、仕事以外で篠塚晃一と付き合いを持たないように努めていた。

## ●ゲーム以前2 幸

幸は専業主婦だった。昔は芸能事務所に所属して、アイドルとして活動していた。胸の大きさと整った顔立ちが自慢で、ごく狭いサークルの中では非常に有名だった。結局、幸はごく狭いサークルでの知名度に固執するあまり、大衆への露出という意味での日の目を見ることはなかった。当時のライバルの多さから言っても仕方のないことだったと思うが、納得がいかないのは、有名になる女の子が必ずしも、すごく可愛いと認めたくなくなるような人間ではなかったことだった。幸は決してしなかったが、それこそ枕営業でもしたのではないかと疑いたくなるような子もいた。幸は、自分が大きな舞台に出られる素質がないことに薄く絶望し、なんとなしに限界を感じ、近いうちに芸能活動を終わりにしようと考えていた。そんな退廃した心境にけじめをつける時期を見極めようとぼんやりと思っていた時、映像製作会社の技術者を名乗る男に出会った。

その男は白石隆志といった。顔はカッコいいタイプではなく、また、好みでもなかったが、丁寧な言葉遣いと、物腰の柔らかさを持った、好青年といった風だった。ちょっとのんびりとした、マイペースなところも感じさせたが、抑圧的な雰囲気があったくなかったのはかなりの好印象だった。幸の周囲に白石隆志のような人間はいなかった。幸が考えるに、白石隆志のような押しの弱い人間はこの業界では生き残れないように思えた。

不思議だった。そしてその不思議は、白石隆志という人間を、男性として魅力的に映すには充分だった。幸は一目惚れをした。普段は撮影現場に来ることのない白石隆志を偶然、現場で見つけたことが、幸にある種の運命を感じさせ、行動を加速させた。アプローチは直接的で明確だった。結果、幸は白石隆志を射止めたのだった。

主導権は幸にあった。白石隆志にとって幸は、娘のような存在なのかも知れないと、幸は考えた。白石隆志の寛大な性格に、父性を感じていたのも事実だった。

しかしその感覚は、その後の幸にとっては「満足のいかない」思いに変換されてしまう可能性を持っていた。

### ●ゲーム以前3 篠塚晃一

今後の社運を賭けた、重要なプロジェクトが進行していた。その統括的な管理を任されたのは篠塚晃一と、彼に近い同僚の男だった。白石隆志は実務レベルでの統括的な役割で、言わば現場と篠塚たちふたりとのパイプ役だった。人にはそれぞれ適正があるから、白石隆志はこの起用に異存はなかった。もちろん、篠塚晃一やもうひとりの男にしても、自分たちが主導権を握ることができるので文句はなかった。

実務の人間が製作を進めていき、白石はその進行度と完成度を篠塚たちに報告をした。篠塚たちはその都度文句を言い、無理な注文をした。白石はそれを現場レベルにまで落とし込み、末端へ伝えた。その工程を繰り返していた。

幾度かその工程を繰り返した頃、ある問題が発生した。

白石隆志にとっては、無理な注文をもらうことに対して怒りもしないし、傷つきもしなかった。現場の状況に合わせてその注文をどこまで実現できるかを折衝していけば良かったからだ。しかし篠塚や側近の男にとっては、その注文を最初からクリアする気のない白石や、注文を実現できない現場の人間は、小さな怒りの種となっていた。そして、その怒りは継続的に積もっていった。現場の人間からしてみれば、白石のような役割を果たす人間がいなければ、組織自体が機能しなくなるのは明白だった。当然、現場の人間は、基本的

な主導権は篠塚と側近の男にあるとしながらも、あくまでも白石の肩を持った。そういった風潮から、「命令には従うが、必ずしも自分にいい感情を抱いていない」ことを知った篠塚は更に憤慨した。こうなってしまうと、側近の男からしても荷が重く感じられた。篠塚と白石の間を取り持とうとしたが、篠塚は断固としてそれを退けた。寛容な白石隆志も、これには皮肉まじりに苦笑するしか選択肢がなかった。

結局、そのプロジェクトは統括の人間を欠いた状態で不時着した。その仕事は可もなく不可もなく、といった出来映えだった。

#### ●ゲーム以前4 側近の男

ある日、夫の隆志が珍しく、会社の人間をふたり、家に招いた。私の強そうな、いかにも業界人といった風貌の男と、どの表情にもなれるような曖昧な表情をした男だった。年齢は夫と大差がないようだったが、話し方や態度から、私の強そうな男が最も権力を持っているようだった。その私の強そうな男は、だいぶ酒に酔っているようで、墓まで持っていく秘密までばらしてしまいそうなほど上機嫌だった。

幸にとつては、私の強そうな男のいかにも業界人といった挙動を見ると、昔のことを思い出すので、あまりいい気分にはなれなかった。それよりも、その隣にいる曖昧な男に興味を持った。私の強そうな男の腰巾着とまではいかないにしても、それなりの処世術を以って地位を守っているような印象を受けた。

大変な仕事が一と段落着いたので飲んでいたんだ、と隆志は言った。少し攻撃的な話し方だった。妻の断り無く自宅に人を招くことから分かるが、回りきっていない呂律や緩んだ顔を見ても、かな

り酔っているようだった。あまりに突然の来客に幸は戸惑ったが、せつかなのであがってもらい、お茶を振舞った。少し離れて座った幸の耳には、他愛もない会社の愚痴や、仕事を終えた達成感についての話が入ってきた。

幸は自然と曖昧な男を目で追っていた。不思議な男だった。尊敬はされないが、特別嫌われもしないような。心に入り込んではいないが、心に寄り添ってくるような男だった。

もう少しでも知りたかもしれない、と願われた曖昧な男は、白石隆志と篠塚晃一が寝静まった後、同僚の妻と関係を持ったのだった。曖昧な男もまた、幸の顔や胸を目で追ってしまっていたのだった。男の執拗な責め方が、幸にとって新鮮で、その快楽は抜け出せるものではなかった。それからというものの、夫の隆志が休日出勤をした日などには、お互いを激しく求め合うような関係になっていた。白石隆志は妻が浮気をしないはずがなとは思ってはいなかったが、しかし曖昧な男にその度胸があるとも思っていなかった。酔っていて思考が回転しなかったのが実際ではあったのだが。そもそも曖昧な男自身、まさか同僚の妻と定期的にセックスをする関係になるとは夢にも思っていなかった。

幸と曖昧な男は、これが罪でないことを頻繁に確認しあった。これは愛であると言いつつ。当然、罰せられる謂れはないのだと。

## ☆一回目

ニュー・ゲーム・スタート。私はビルから落下中だった。

「…は？」

最高に研ぎ澄まされた感覚の中で、思考する。

何故自分が落ちているのか？



いや、それよりもどうやれば助かるのか？

頭は確実に守らないといけない。頭を両腕で抱え込むようにする。しかし、わき腹が空いたこの状態で落ちたら呼吸がままならなくなる。片腕を腹に回す。

がら空きの背中から落下することさえ免れれば、呼吸はできるはずだ。

この体勢なら、致命的な衝撃は大幅に和らげることができるだろう。

あとはできるだけ着地時に足をクッションとして入れることができるれば、死にはしないだろう。

最悪の状況なのは変わらないが、何とか死なずに済みそうだ。

地面まであと数秒、私は何故落ちているのかを確かめたくなくなった。自由が利かない空中で、なんとか体を捻り、上を見る。

自分が働く会社のビルが目の前に見える。その屋上の柵の向こう側に、知った顔が見える。こちらを見下ろしている。

心なしか少し嬉しそうだ。

そこにいたのは篠塚晃一だった。

私を突き落としたのだろうか？

私は驚きで全身がグッと強張った。動揺から、強固だったガードがふと緩んだ。

その瞬間に私は地面に叩きつけられた。

肩が入り、自製の利かなくなった首はそのまましなり、頭も地面にぶつかる。その勢いのまま腹や背中も落下し、全身を打つ結果になる。まともに落ちてしまったことで、私は即死した。

## ★輪廻

白石は考えた。どれほど寛容であったとしても、殺されてしまっ

ては許すわけにはいかないと。

白石は数年前に、篠塚晃一を家に招いたことがあった。その時に泥酔状態の篠塚が発した一言を、白石は思い出した。

「脱税ってのは案外バレないもんだな、ハハハ！」

## ☆二回目

コンティニュー・ゲーム・スタート。私はビルから落下中だった。「…またか」

最高に研ぎ澄まされた感覚の中で、思考する。

自分が落ちているのは篠塚晃一のせいだ。

私は、同じ時を繰り返している事実については考えなかった。

それよりも、憎き篠塚晃一を、どうにかして奈落の底に突き落としかかった。

私をこうして落とすことで得られるプラスの感情を、すべて無効にしてしまうような地獄を見せたかった。

私は篠塚の秘密を握っていた。

私はそれを暴露することに全力を注ぎようと決意した。

勝負は落ちた直後から死ぬまでの数十秒間。即死でなければ、メーラーの一通くらいは打てる長さだ。

その時間を使って、ネット掲示板に、篠塚の悪行を「晒し」てやろうと考えた。

落ちるまでの時間で、文面を考えた。

篠塚晃一という男が自分の意志で脱税をしているという事実を書けばそれでいい。

私は少し気が楽になった。

「ういぞうかいしゅ 篠塚こういち 脱税 たがく 恋 に」

## ★輪廻

死に損ないの白石が書いた文は、その奇妙さから解読がすすめられ、通報に至った。

篠塚晃一は単独での脱税の疑いで連行された。聴取や調査の結果、篠塚は黒と判断され、勾留されて、裁判を待つこととなった。白石の望みは果たされたのだった。

しかし、白石隆志が果たした望みは、別の歪みを生んでしまっていた。

白石隆志は、妻が恋しくなった。

## ☆三回目

コンティニュー・ゲーム・スタート。

私はビルから落下中だった。

「…幸」

絶対に生きると私は決意した。

全身を堅く守り、また、全身にまんべんなく衝撃が行き渡るように工夫した。

私はなんとか生きることができたようだった。

これからは妻がずっとそばにいてくれる。イイハナシダ。

## ★輪廻

白石隆志は生命を維持したが、目を開くことはなかった。妻の幸は夫が植物人間になったショックから、狂ったようにそばに居続けた。浮気相手の男と会うこともやめた。むしろ、浮気の罪悪感が幸を狂わせたのだった。

白石隆志は、望みを叶えたことに変わりはないかった。

## ☆四回目

コンティニュー・ゲーム・スタート。ビルから落下。

私は死ななかった。だが両足を失ってしまった。妻に車いすで押してもらわないと生活ができなかった。幸から笑顔が消えた。私は申し訳なくて、自殺した。

## ★輪廻

白石は同僚への怒りや、妻への罪悪感を持ったまま、ひとつの時間を繰り返しすることに疲れ始めていた。次が最後だと、決めた。

## ☆五回目

コンティニュー・ゲーム・スタート。ビルから落下。  
死ななかった。だが脳に深刻なダメージを受け、言語障害となつた。妻は、夫を施設に押し込めて浮気相手と逃げてしまった。

## ★輪廻

最後と決めたはずなのに、またここにいることに白石は嘆息した。このサイクルはいつ終わるのだろう。もうハッピーエンドなんてないと白石は気づいていた。自分も含めて、みんなが幸せな時間が、もう来ない。

白石は全てが馬鹿らしくなり、全ての氣力を失った。

## ◎トゥルーエンド

コンティニュー・ゲーム・スタート。ビルから落下。  
白石隆志は死んだ。犯人も、妻の浮気も分からないまま。

## (後書き)

### ● アナザーエンド

私は何もしたくない。望むことも、望みのために闘うことも、望みを諦めることさえ。

私はビルから何者かに突き落とされていた。風を感じる。

風さえも面倒だ。

落ちるのも体力が要る。

浮遊感が面倒だ。

顔が強ばるのが疲れる。

時間が流れるのが疎ましい。

視界が猛スピードで流れるのがうざったい。

頭に浮かぶ妻の顔がうるさい。

風の音が耳に入るのもだるい。

「…………やめさせてもらうわ」

私はその全てを辞めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1431q/>

---

笑え笑え 人間は交換可能

2011年1月16日04時41分発行